これ全部ボールペンなんですけどね。
40年たつとインクが固まって全部書けなくなっている！
書けなければ文具としての価値はゼロ、面白さもゼロですよね。

香り付き消しゴムもありました。イチゴやレモンなどフルーツなんか当たり前、コーヒーにカレー、ピザ、栗ようかん、プリン、クリームソーダとかあるんです。かぐと確かにその香り！　即購入！　なのに40年たつとイチゴもカレーも栗ようかんも全部同じゴムの匂い……あーあ、消える感じもしないただのゴムの塊。面白さはゼロ！

他にも変色していたり、触るだけでポロポロ欠けたり、謎の液体が出て溶けていたり！　きゃー！　もうホラーの世界！　文具のゾンビ化です。プラスチックや塩化ビニールという新素材って、実は木や金属よりもろいものだと実感。将来ひょっとしたら価値が高まるかもと期待をして集めていたコレクションはほぼ全滅、大きな見込み違いでした。40年たっても使えるシャープペンシルや鉛筆削りは少々高くして、あとは１個100円で投げ売り！　それでも懐かしい昭和時代のパッケージデザインだったりするので意外に売れているのはちょっとうれしいですけど。

文房具と一緒に出てきた旅先で買った昔のおもちゃも、どうしてしまっているだけで動かなくなるんでしょうか。遊んでもらえないおもちゃは死ぬ！きっとおもちゃにも魂があるのですね。そんなおもちゃたちを店の奥の大きなテーブルに山積みにして「おもちゃの病院」。暇な店番の折に一つずつ直して生き返らせています。なぜ動かないかをひげダルマオーナーと討論して直しっこ、これが結構楽しい！

しまってあっただけなのにパーツが足りなくなっているのはなぜなんでしょうか。ひょっとしたら、夜中におもちゃの精たちが現れて夢中で遊んで持って行っちゃったのかな？　経年劣化も妖精さんの仕業なのかな？　そう思って納得するしかないおもちゃの世界はやっぱり不思議がいっぱいです。

鎌倉おもちゃ屋物語 その8

くろすかずきよ

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ！

いよいよお店を全スペース受け継ぐことになり、果たして買い集めた駄玩具とペーパークラフト作品だけで棚が全部埋まるのだろうかという心配。
まずは、ひげダルマオーナーの売っていた外国製高級幼児おもちゃも棚を一つ残すことにしました。今までのお店の常連さんのためと、急に仕事がなくなったオーナーがすることなくて寂しがってボケたりしないようにいつでも来て自分のおもちゃを売ってくださいよという敬老の気持ち……実は年齢は五つしか違わないんですけどね。で、売り上げの何割か頂くというのもおこがましいし、何より面倒くさいので、ここで売れたものはすべてオーナーの稼ぎという治外法権のエリアです。一人で店番するよりは時々来てもらっておもちゃ談義をするほうが断然楽しいですしね。
さて、他に棚を埋めるものはないかと探していたら出てきたのが昔の文房具コレクションです。

「擬態」って知ってますか？　まるで葉っぱのような蝶とか枝のようなバッタとか蛇に見える幼虫とか、生き物が身を守るために違うものに見えるようなデザインの体になっている……これ、昔文房具ではやったんですよ。
名付けて「擬態文具」、私それを集めていたのです。例えばこんなものたち。

「これなーんだ？」というクイズ番組ができそうで面白いでしょ。なんのために集めていたのでしょうか、まさか将来おもちゃ屋やるなんて思ってもいませんしね。そんな文具が２段の衣装用カラーボックス二つ分出てきまして、最初は、これはお宝か！　よくぞ集めていたものだと喜んだのですけど、すぐに若気の至りだったという後悔の言葉になってしまったのは……。
時がたつって悲しいものです。文具売り場で見つけて嬉々として買ったあの時からもう40年たっていますから……。

黒須和清　1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修会講師の仕事などで忙しい。